

在宅医療

interviews



ご自由にお持ちください

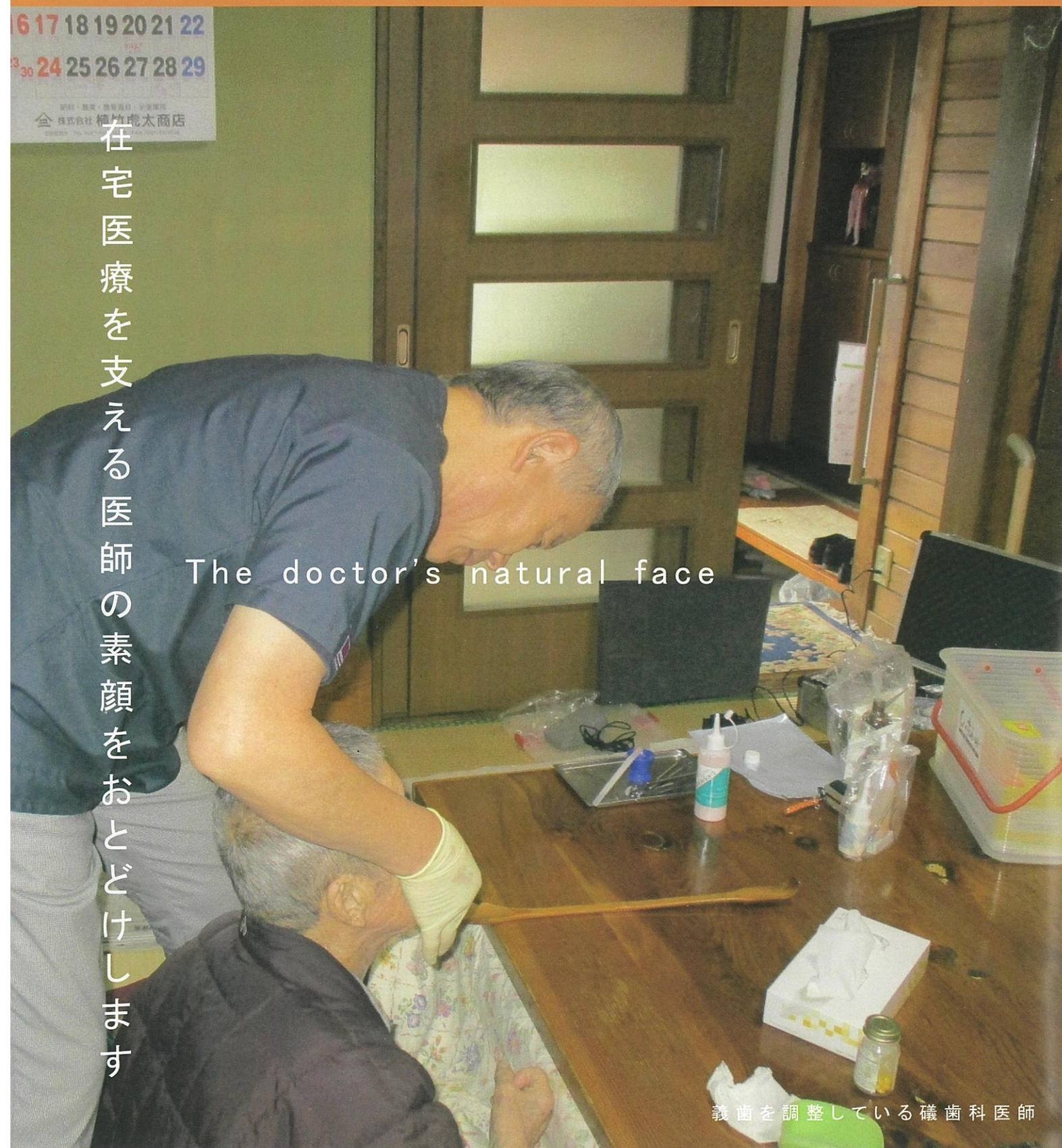
16 17 18 19 20 21 22
23 24 25 26 27 28 29

那須塩原市 株式会社 楠竹鹿太商店

在宅医療を支える医師の素顔をおとどけします

The doctor's natural face

義歯を調整している歯科医師



在宅医療ってなに？

契機

在宅医療の世界を皆さまに知って

いただくための広報誌の第2号です。

この地域で在宅医療に取り組まれて

いる3名の方にお話を伺いました。

仕事のスタンスやプライベートなど

「医師になられたきっかけは
大学を受験する際に法学部と医学部
どちらに進むか迷っていたのですが、
親の薦めもあり医学部にしました。そ
れまでいろいろ面倒を掛けたので恩返
しをしたかったという思いもありまし
た。今はその選択は正解だったかなと
思っています。」

「医師になられてからの道のり」は

「自治医科大学を卒業したあと、県庁
の職員として9年間栃木県内のいろい
ろな医療機関で勤務しました。専門は
消化器内科で胃カメラ、大腸、アンギ

オなど地方の病院では何でもやりま
した。それが終わってからの今、那須
訪問診療所を立ち上げました。」

「在宅医療に取り組むきっかけは

「病院で勤めている頃、家に退院し
たいが誰も見てくれる人がいないの
で帰るに帰れないと耳にすることが
多々ありました。このような患者さ
んのためになにか役に立つ事ができ
ないかと考え、在宅医療に取り組み
始めました。不足していて困ってい
るのだったら自分達でやってみま
おうという単純な発想でした。」

診療

「何名の患者さんを担当していますか

「患者数は220名位ですが、入所
施設への訪問もしているのでご自宅
への訪問はうち80人位です。月15
20名位のペースで新規にご紹介いた
だいています。1日の訪問件数は7
件位です。」

「訪問される範囲は

「基本的には診療所から16キロまで
の範囲ですが、訪問できる医師がい
ないという場合もあるので、時々
み出ることがあります。より多くの

方に在宅医療を提供したいので、他
の地域にもう一つ診療所をつくら
うと計画しています。」

「在宅医療に関わられて印象に残った 出来事はありますか

「小さいお子さんを3ヶ月位、在宅
で担当し看取らせてもらいました。
子供を看取るということや両親の
気持ちを考えると、とてもいたたま
れない気持ちになりました。亡くな
られたその晩は、ご両親とその子だ
けで過ごしていただいて次の日の朝
に送り出しました。それまでに小児
科の専門的な経験もなかったので、
自信を持って向き合ってあげられず
課題ばかり残った経験でした。」

「在宅関係の他職種と連携することは ありますか

「看護師、ケアマネ、リハ職などの
医療福祉だけではなく社会人ラグ
ビーの選手なども当院で働いていま
す。まちづくりという視点でもっと
役立ちたいと考えています。例えば
黒磯駅前に屋台を作るとか。」



在宅医療を支える医師の素顔をおとどけます

The doctor's natural face

課題

―在宅医療の課題は

「診療所を立ち上げた当初は診療の他にも緊急コールを全部自分で受けて、スケジュールの調整も自分でして自分だけで仕事を抱えて無理がたたつて倒れたことがあります。今はスタッフが専属について電話での対応や調整などをしてくれるようになって比較的楽にできるようになりました。緊張の糸

がずつと切れないのは良くないと学びました。医者はひとりで抱え、医療は自分でしかできないと思いがちですが、それを多職種で分け合ってやっていかないといけないと思っています。」

余暇

―お好きなことは？

「大学時代にラグビーを始め、それ以来続けています。ロックという体を張るポジションです。非常勤で来てくれる2人の医師は

―仕事も人生も楽しいですか

「プライベートと仕事の境目は考えたことがありません。全部自分の思うとおりうまくいくわけではないのですが、自分自身ではなく何か（誰か）のために動こうとすると自然と力が湧いて出てくるんですね。という話も盛り込んでください（笑）。」

―休みの日の過ごし方は？

「週末だけ宇都宮の自宅に帰ります。子供が4人いますので、休日はおっぱら子供たちと過ごしています。今度、一番上の子が中学受験を控えている



ので勉強を教えることもあります。ホワイトボードのなかいかいやつを買って家庭教師です。長男が北海道新幹線に興味があり乗りたいと言うので、今週末は函館まで二人で新幹線に乗って旅行に行ってきます。」



どちらもラグビーの仲間です。僕にとつて信頼して任せられるのがラグビーでつながった仲間なんです。宇都宮にある社会人ラグビーチームのスポンサーにもなっています。いつの日か診療所の隣に人工芝のラグビー場を作りチーム結成しようと思っています。部員を集めて相手を招待し試合して。今からとても楽しみみです。」



大学時代からラグビーを趣味とし、現在でもプレーしている。



那須訪問診療所

TEL 0287-73-5047

那須塩原市豊浦10-706

<http://www.willife.info/>



那須訪問診療所には在宅医療を支える医療・介護・福祉の専門職が揃う

契機

「医師になられたきっかけは」

「高校のときに宮城音弥という心理学者の本を読んで興味を持ち、精神科医になりたいなと思ったのがきっかけでした。でも、医学生の際に精神科で研修してみると思っていたものとまるで違ったので、まったく興味がなくなっていました。」

インタビューア 秋葉 喜美子
(国際医療福祉大学 看護学科)

はら たかし

原 孝志 医師

はらクリニック

「医師となつてからの道のりは」

「医学部を卒業する際に研修する診療科を選ぶのですが、当時出身大学の自治医科大学では外科か内科のどちらかを選ぶのが一般的でした。自分が行った結果がスッキリ分かりやすいので外科を選びました。しかし、手先は器用ではありません。自治医科大学は出身地の医療機関で一定期間勤務することで学資の返済が免除されます。私は栃木県出身なので、卒業後2年間研修した後、鹿沼市の上都賀総合病院や栗山村(現日光市)の国民健康診療所、大田原赤十字病院(現那須赤十字病院)などで勤務して義務を終えた後に、ちよつとふらふらし、また大田原赤十字病院に戻って7年勤務しました。」

「開業されたきっかけは」

「本当はずつと那須赤十字病院で勤務医でいる予定だったのですが、西那須野町で開業予定だった医院の院長が開業前に急逝され、そこを買い取る形で開業しました。とくに予定もなかったで資金もなかったのですが、まあ何とかなるだろうということで始めました。行き当たりばつたりの人生です。生まれは足利市で西那須野町には縁もゆかりもなかったので開業当初は患者さんが少なく1日に1人だけということもありました。先行きを不安に思いながらも先輩医師に励まされながらどうにかやっていけるようになりました。開業当時は外科や内科だけではなく整形外科の患者さんも引き受けました。整形外科の経験はなかったため、専門の医師にこつそりと教わりにいったものです。」

診療

「いつから在宅医療に携わっていますか？」

「栗山村の国民健康診療所にいる頃に往診や在宅での看取りも経験し、興味があったのでクリニックを開業した当初から在宅医療にも取り組み始めました。」



訪問の際は白衣ではなく普段着スタイル。診療用具は手提げ籠に入れて出向く。

「今、在宅医療の患者数は？またこれまで何名位在宅で診療をされましたか？」

「いま在宅で診療しているのは30名位です。午前と午後の外来診療の合間に2件〜5件訪問しています。時間にして1時間〜1時間半位です。午後の外来診療の開始が遅れ、お待たせしてしまうことも多いので、もしかしたら不満な方もいるかもしれないです。これまで在宅で看取った患者さんの数は300名位でしょうか。」



在宅医療を支える医師の素顔をおとどけます

The doctor's natural face

栃木県足利市出身。自治医科大学を卒業後、自治医科大学附属病院にて外科を研修。その後、栃木県内の医療施設に勤務した後、旧西那須野町にてはらクリニックを開業し、地域に密着した医療を行っている。

―訪問される範囲は

「昔は塩原や小川町、那須町まで行っていました。最近は移動が大変なので旧西那須野町近辺だけとしています。以前にあと1ヶ月で看取りだからとお願いされた那須町の方で、結局4、5年続いたこともありました。」

―お一人で訪問されるのですか？

「看護師が一名同行します。」

―訪問看護師と連携されることはありますか？

「私だけでは対応が間に合わないのです、基本的には訪問看護を利用してもらいます。一次対応は訪問看護師さんにお任せすることが多いので助かっています。どこの訪問看護ステーションも連携しやすいですよ。」



医師会の野球チームでは肩痛を押して内野手を務めているそうです（若手募集中）

―印象に残っている患者さんはいらっしゃいますか？

「短い期間の付き合いの方よりは長い期間関わった患者さんのほうが印象に残ります。長い間の付き合いでまるで家族のような気持ちになるので、看取る際は辛い気持ちになることもあり、患者さんに感謝されるとやっついて良かったなと感じます。」

課題

―在宅医療の課題は

「国は外来診療をしながら往診もと考えているようですが、現実的には在宅医療専門の医師が担っていくこととなると思います。今まで在宅医療を経験していなかった医師が新しく参画するのは難しいかもしれません。若手医師が開業する当初から外来と並行して在宅医療もしていくという形ならばスムーズに入れるのではないのでしょうか。入院医療機関で勤務する医師も、看取り時期の患者さんとあと1週間でお亡くなりになるからと急に退院させるのではなく、自宅での生活を味わう時間を演出できるように、もう少し早い時期に準備をして帰らせてあげてほしいと思います。」

趣味

―休日はどうのように過ごされていますか？

「主に野球と山歩きをしています。高校と大学の時に野球をしていました。野球は医師会のチームに入っていて、金曜日の夜に大田原高校のグラウンドや美原の運動公園で練習しています。チームの平均年齢？・聞かないください。ポジションは内野なのですが肩がボロボロでろくに投げられなくなっています。試合や練習をするたびに痛いところがあるので湿布薬を貼っています。年に1回栃木県の医師会対抗大会に出場しています。山歩きは休診日の日曜と第2、4土曜日に出かけています。ほとんどは一人歩きます。」



月に一度の会議では医療・介護・福祉・行政等多職種と在宅医療の推進について話し合う

連携

―医療と介護の多職種が集まる連携会議に参加されている感想は？

「このような多職種が集まる会は顔の見える関係を作りやすく良いのではないのでしょうか。他の職種の方がどのように考えて活動しているのかが分かるのも良いですね。ただし今は各種の選抜メンバーだけが出席しているので、広く参加できる会を年2回位は開催しても良いのではないかと思います。」



はらクリニック
那須塩原市東三島4-54-7
0287-39-5232

契機

「歯科医になろうと思ったきっかけは

「高校を受験する3日前にひょう疽になってしまったのですが、当時実家の近所で開業したばかりの瀧田医院で治療していただいて無事に試験を受けることができてとても助かりました。後に瀧田先生に『君は将来何になりたいの?』と聞かれた際に、困っている人

インタビュアー 渡邊 恵美
(地域包括支援センター さちの森)

磯 勝彦 医師

磯齒科医院

を助けられる医者がいかなと思いましたが、たまたま、瀧田先生に『医者になろうと思いません』とお話ししたところ、理由は定かではないけれども『医者ではなく歯医者が良いぞ』と言われて歯科医を目指すことになったわけですが、それから20年位たつて瀧田先生にそのいきさつをお話したのですが、まるで覚えていないと言われてしまいました。そんなものですよ。私の影響を受けたせいも長野で歯科医をしています。」

「歯科医師となつてからの道のりは

「大学を卒業してから大病院の口腔外科で口唇口蓋裂を中心とした診療に携わっていました。28歳の時に親の

望みもあり黒磯に戻り開業しました。

今は歯科医師がとも増えましたが、でも当時は地域に6人しかいなかったもので、開業したら月ごとに倍々と患者さんが増えてとても忙しかったことを覚えています。元々困っている人を助けたいと思ひ歯科医師になろうと思つたので、1992年からはロータリークラブのプロジェクトでフィリピンやバリ、ネパールなどに出向き内科の金澤先生の教えを受けながら街かどで子供のう蝕予防や歯科治療を行うことをライフワークとしていました。」

「在宅医療に携わつたきっかけは

「海外の街かどで歯を抜いたり削つたりしていたことも在宅医療といえるかもしれませんが。2010年頃になって身体を壊したこともあつて海外に出向き治療するのが難しくなり、なにか身近でできる人の役に立つことを考えたところ、携わる歯科医師が不足し患者さんやご家族から求められている在宅医療が良いかなと思ひ携わり始めました。」

診療

「どのようにつ療されていますか

「一人の方に定期的に訪問するというよりは、寝たきりで外来に来ることが



1990年代に海外の街かどで行つた子供たちへの歯科治療が在宅医療の原点となっている

難しい方のご家族からの相談や、困つたご家族等から栃木県歯科医師会のとちぎ在宅歯科医療連携室に相談が入り、そこからの派遣依頼で訪問するなど不定期なことが多いです。主に午前の外来診療が終わつた後、午後の診療開始まで時間の合間を縫い、海外で治療をしていた頃にそろえた治療セットを持って出向きます。この間はお昼前の予約が急遽キャンセルになったのでその合間を縫つて訪問したのですが、結局お宅の場所が分からず迷つてしまい、昼食抜きで午後の診療が始まつてしまいました。お宅に訪問する以外にも2つの入所施設から依頼を受けて治療に向いています。」

在宅医療を支える医師の素顔をおとどけします

The doctor's natural face

栃木県那須塩原市出身。長野県の松本歯科大学を卒業後、同大学第二口腔外科に入局し研鑽を積む。昭和55年に旧黒磯市にて磯齒科医院を開業。現在那須歯科医師会の会長を務められている。

印象に残っている出来事は

「外来と違って自分の家で作った野菜をいただいたり、患者さんが自分で描いた絵をくれたりと感謝を表現されることが多いのは印象的です。」

課題

在宅での歯科医療の課題は

「治療セットは、自前の物と栃木県歯科医師会からお借りしている物があります。それでも出来ることが限られ、十分な治療ができないケースが多いので、結局2回目の治療から外来に来ていただくこともあります。また、立ち合ってくれる家族等がないと診療ができないので、独居の方の治療には困ることがあります。那須塩原市では



新聞の上での義歯の調整の様子。在宅という制限のある環境の中で工夫をしながら診療する



在宅歯科診療用の治療セット

まだそこまで歯科医師は充足していないので、在宅医療に携わる歯科医師の数が不足しているのも課題です。」

歯科の在宅医療は今後進んでいくのでしょうか？

「現在、歯科医師の数が多くあふれている地域もあるので、そういった所では外来だけではなく在宅歯科診療に力を入れようとする歯科医師もいるようです。今後は在宅医療を専門にする歯科医師も出てくるかもしれません。ただし、治療に当たって厚生労働省が定める施設基準を満たさなければならぬところがありますから、治療内容も含め、在宅医療を進めていく上でネックになるかもしれません。」

余暇

「休みの日の過ごし方」は？

「身体を動かすことが好きなので20代はラグビー（スクラムハーフというポジション）、30代はトライアスロン（福島整形外科の福島先生には随分お世話になりました）、40代からは極真空手をし、黒帯を頂いてます。しかし、2016年に腰の手術をしてからあまりハードには動けないので、今は若いころからやっているギターを趣味にしています。宇都宮にギターの先生がいるので習い続けています。3年前の「いきいきふれあいセンター祭り」ではジャズの「ブラック・マジック・ウーマン」という曲をバンド演奏しました。」



今回の訪問先では診療後はお昼ご飯をご馳走になりました



極真空手の審判員をしていた時の写真

他にピアノとドラムを演奏することも気分転換の一つになっています。よかったですら今度、一緒にバンドを組んで演奏しませんか？」



磯歯科医院

那須塩原市高砂町4-6

0287-64-2171

在宅医療 interviews

2018年 秋冬号

2018年 11月30日発行

【発行】

那須塩原市

【配布方法・配布場所】

市役所・医師会・医療機関
介護事業所他

【配布地域】

栃木県那須塩原市・大田原市
那須町他

STAFF

◎企画・デザイン・編集・写真

那須塩原市在宅医療・介護連携推進事業
多職種連携会議

『在宅医療への関心を深める』班

磯 勝彦 歯科医師

(磯歯科医院)

原 真 医師

(原内科小児科医院)

黒崎 史果 医師

(那須塩原クリニック)

渡邊 恵美 保健師

(地域包括支援センターさちの森)

秋葉 喜美子 看護師

(国際医療福祉大学 看護学科)

高橋 秀介 理学療法士

(菅間記念病院)

◎似顔絵

ひでお

(似顔絵ボランティア)

次号2019年4月発行予定

在宅医療 豆知識

2025年問題と在宅医療



2025年問題ってなに？

既読
2025年には「団塊の世代」が75歳以上となり、国民の5人に1人が75歳以上、3人に1人が65歳以上という世界に類を見ない「超・超高齢社会」が訪れます。高齢化により医療や介護の必要となる方が増えることで、財源や人手不足が懸念されます。



在宅医療とどのような関係があるの？

既読
財源面等からこれ以上入院病床を増やすことは困難ですし、高齢者の多くは療養が必要となっても住み慣れた地域で最期まで暮らし続けたいと望んでいます。また、重い要介護となると外来通院が難しくなります。



既読
そこで入院や外来だけではなく、医師やその他の医療職が住まいに出向き医療的支援を行う「在宅医療」の充実が不可欠です。



在宅医療の充実には何が必要なの？

既読
在宅医療に取り組む病院、診療所、薬局、訪問看護ステーションなどのサービス事業者の参入を促し充実させることに加えて、医療職間や医療・介護職間の連携を深め、質を高める取り組みが必要です。特に在宅医療の核となりリーダーシップを発揮する「かかりつけ医」の積極的な参加と関わりが求められています。



似顔絵

今回、先生方の似顔絵を描いていた
だいた那須塩原市在住の「ひでお」
さんです。デイサービス等で似顔絵
ボランティア活動中。希望の方は下記
までご連絡ください！

iroenpitu87@yahoo.co.jp

在宅医療を世に広めるための広報紙第2号が完成し、遂に皆様にお届けすることができました。今回は新たに歯科医師の磯先生にもお話を伺うことができ、知られざる在宅医療の世界への理解が深まったように感じます。取材のために訪問に同行させて頂くと、気さくにお話ししながら丁寧に診療され、患者さんやご家族も先生を信頼し訪問を心から待ちわびている様子がとても印象的でした。在宅医療は通院できない患者さんにとってはなくてはならない制度だと再確認をした次第です。また、広報誌づくりのために会議を重ね話し合う中で、制作スタッフの黒崎医師と磯歯科医師の間で良い連携事例も生まれました。「相手を知ることが在宅医療への理解を深める一助となれば幸いです。」この広報誌が在宅医療への理解を深める一助となることを信じて、これからも私達の「在宅医療への関心を深める」班の挑戦は続きます！

編集後記